

純日本書道の確立

金川寿治

書は文字を素材として、これに変化統一等美的要素を加えて表したもので、即ち文字の美的表現されたものである。現に墨象派の如き黒と白とで美を表わそうとする向もあるが、これは文字性を否定しているもので、書の範疇からは逸脱している。文字性を離れては書は成立しない。それではわが国に於て何時頃から文字があったであらうか、漢字伝来以前国字の有無について古來學者の間に論争があった。平安時代斎部広成は古語拾遺序文に於て「蓋聞上古之世未有文字、貴賤老少口々相伝」と、三善清行は勅命勘文に於て「上古之事は秋日本紀開題で「漢字伝來我朝者応神天皇御宇也、於和字者其起在神代歟」と記しその後裔兼俱は一五、三〇〇字の字数まで挙げてゐる。更に江戸時代平田篤胤は「神字日文伝」を著し、鹿島神宮・

三輪神社・弥比古神社・鶴岡八幡宮・法隆寺の庫中から発見した「日文」という古代文字の楷草二体を発表している。その他阿波の社や、伊勢の神庫にあるという「秀真」や河内の平岡泡輪社蔵の土笥に刻された「天名地鎮」も一種の神代文字と称されている。

このように神代文字の有無については兩説あるも、これを確定する歴史上の根拠はない。

言靈の囀と誇った面目上後人の仮托したものでないだろうか。すべて文字の発達は象形に端を発し義字から音字に移行する。神代文字はこの自然の経路を辿らず、己に音字であるところに不自然さがあり、今日に於ては神代文字を認める者は殆んどなく、わが国書道の起原は漢字の伝來に始まる。

わが国の正史に現れた漢字の伝來は、三韓征伐後の応神天皇の朝（紀元二八五年）であるが、それ以前わが国と中國とは相当の交渉

があり、文字学問の伝来を伺い得る資料がある。この点についてわが文献には徴すべきものが無いが、中国文献によるとわが九州の姦族と漢や魏国との間に互に交通した記録がありその間漢字の伝来を認むべき事項がある。

前漢地理志に「桑浪海中有倭人分爲百余国以歲時來獻見」とある。これによると倭国は毎年貢物を持って漢に赴いていたことが伺われる。

又後漢書によると「建武中元二年倭奴国奉貢朝賀使人自称大夫光武賜以印綬」とある。倭奴国は北九州に住んでいた豪族であることは史学者の肯定するところである。文中の光武帝は名は劉秀、漢朝の後裔で前漢から帝位を奪った新を滅し後漢第一代の帝位についてた人である。

わが江戸時代の中期天明四年に筑前国糟屋郡志賀島叶崎で百姓甚兵衛が澗漑排水用の田の溝を改修し溝の畔を切り落していると、二人で持ち上げる程の巨石が現れ、それをてこで掘り起してその石の下から金印を発掘した。

これには録書で「漢委奴国王」と刻してある。この金印は当時の福岡藩主黒田侯に献せられ今でも黒田家に保存されている。光武帝が授けた印綬がこの甚兵衛の発掘した金印であることは史学者の肯定するところであり、建武中元二年は紀元五十七年で王仁の来朝より

も二二八年前である。この頃すでに漢字はわが国に伝っていたのである。

更に魏志倭人伝には「正始元年倭王因使上表答謝恩詔」の記事がある。これはわが耶馬台国と魏国との間に於て頻繁に交通し使節が往復していた。景初二年魏の明帝は耶馬台国王卑弥呼に「親魏倭王」の称号とそれを刻した金印を授けた。この金印は現存していないが、中国北宋徽宗皇帝の「宣和集印史」およびわが寛政九年藤原貞幹著の「好古日録」にその印影が収められている。これに対してその翌々年卑弥呼は使節に托して上表しお礼を申し上げたのである。この記事で注目すべきは「上表」という語でこれは文書を以て奏上したので当時わが国に於ても北九州の住民中には漢字を読解するのみでなくこれを書写する能力を有していた者があることを証明している。正始元年は紀元二四〇年で王仁の来朝に先つこと四十五年である。

わが正史に表れた漢字の伝来は、応神天皇の十六年百済の博士王仁が来朝し論語十卷千字文一卷を献上した時である。

その後朝廷の文事は帰化人およびその子孫が司り西史部には王仁の子孫が、東史部には阿知使主、その子孫が任せられた。阿知使主は応神天皇の二十年西晋よりの帰化人である。この漢字伝来当時、その伝習を受けたのは皇族貴族の極めて狭い範圍に止ったが、それ

より約五十年後の履中天皇の時代には諸國に國史こくしを置き言事ごんじを記して中央に通達せしめられたことが日本書紀の履中記に記載されている。

こうして文字の使用が地方にまで及んでいった。

その後欽明天皇の十三年には仏教が伝来して仏教芸術の端が開かれ、推古天皇の十八年高麗の僧曇徴によって墨・紙の製法が、燕の宰相衛門の子孫によって筆の製法が伝えられ、ここに書字材料の國産を見るようになり仏教の興隆につれ写経の隆盛を促し大量に使用され書道の流行に大いなる役割を果たした。文武天皇の大宝二年には都に大學を設置し書博士をして書道の教授が行われるようになり、こうしてわが國書道の礎は除々に固って行ったのである。

元明天皇が和銅三年奈良に都を奠められて七代七十余年の奈良時代となる。奈良時代は政治經濟が充実し唐風文化が栄え仏教が興隆してこれに伴う美術工藝が発達し所謂天平文化が生み出された時期である。万葉の歌のそのように健康的で明るく充実感に溢れた時代である。

大和時代の文化は中國模倣であったが、この奈良時代の文化は大和時代のそれに輪をかけたような唐の超模倣であった。しかしその模倣たるや単なる機械的模倣ではない。自主的態度をもって國民の精神生活にも物質生活にも適応したるものを選択し吸収したもので

その模倣の根底に於て日本文化の獨立を計らんとする時代の激しい意欲があった。古事記・日本書紀・風土記の編纂・東大寺の建立・万葉集の撰などはこの意欲の現れと見るべきである。

奈良時代の書道を代表するものは写経である。この時代は仏教が興隆し聖武天皇は國毎に僧と尼の國分寺を建てさせられ奈良には總國分寺として東大寺を建立、全國寺院をその統制下に置かれた。

勅命による写経は聖武天皇の神龜九・十年大般若経を、同十三年には法華經十部と観音經とを國毎に書写せしめられている。

当時經典の需要が莫大な量にのぼったのは寺院を建立した場合必ず経堂を建てる。経堂には經典を納入する。全國の國分寺の他に數多の寺院が建立されその経堂に納入する經典は実に夥しい數に達する。他に仏教研究のテキストとしての經典の需要も多くこれらの需要を満す為經典の書写が盛んに行われ従来の任意的個別的な書写より組織的統制的に行われるようになり、実に写経は当時の國家的大事業でわが國写経史上最盛の時期を現出した。

右は公的立場から見た写経であるが個人的にも自己の冥利罪業の消滅を願ひ、祖先知人の冥福を祈つての写経も盛んに行われ、その頃の写経の現存するものは正倉院に所蔵されているものだけでも千余卷の多きに達する。

公的写経は写経所に於て「試字」の試験に合格した写経生によつ

て行われたが、公私を問わず身心を清め清浄の境地に端座して敬虔な態度を以て全精神を傾注して一行十七字式、謹嚴端正な楷書を述書していったものでこれに適した一種の書風即ち写経体が生じた。

又奈良時代は唐との交通が盛んで遣唐使、留学生、留学僧等の往復によって、一般文化と共に多くの中国名蹟が輸入された。奈良時代の文化は唐文化の強い影響を受けて展開したもので書も亦これと軌を一にした。当時唐では特に羲之を尊重したが、この風はわが国にも波及し羲之の書風はわが天平文化人の間に於ても尊重された。羲之を賞讃した例として万葉集の歌に

大海之底乎深目而結羲之妹心者疑毛無(卷十二)

世間常如是耳加結大王てし白玉之緒絶業思者(卷七)

とあるように羲之又は大王(子の王猷之を小王と呼ぶに對し羲之を大王と言ひ二人を併せて二王と称す)と書いて助動詞のテシと読ましている。「テシ」は手師即ち書の師という意味から連想したもので、羲之の用例か六ヶ所大王の用例が四ヶ所もある。当時羲之の名がいかにか普遍的になつていたかを伺ひ知ることが出来る。

尚天平勝宝八年六月二十一日聖武天皇の七七忌に当り光明皇后が天皇御在世中の遺品を東大寺に献納され御冥福を祈られた。これらの品々は後に正倉院に移されたが、その献納目録を記した國家珍宝等帳に

「書法二十卷榻晋王右軍之草書同羲之扇書」

とあり一巻毎に行数紙質軸まで明細に記載してある。御物の毀乱帖もこの中にある。二十巻で八六五行の多数の羲之の書が渡来している。なお正倉院には同時に東大寺に献納された光明皇后の染穀論もあるが、これも輸入の羲之の染穀論を皇后が臨書されたもので、正倉院の書蹟の大部分が羲之系統である。奈良時代わが国の書に羲之がいかにか大なる地位を占め尊重されていたかが推測される。

更に奈良時代今一つ見逃してならないのは万葉仮名の發現である。漢字伝来以後わが国人は漢字の読解力書写力は次第に向上したが、何といつても漢字は中国の文字である。この他國文字によって國語を表現することは誠に至難な業である。この困難を克服して天平の文化人は漢字を使用しその借音ならびに交測によって國語の表現に成功した。この國語表現に使用した漢字を總稱して万葉仮名という。當時の人々は万葉仮名の使用にはよく馴れ、実に自由自在奇智百出一種の遊戯的使用にまで發展している。

この万葉仮名の出現は平安時代仮名完成の端を開くものである。次の平安時代は宗教学問芸術百般に亘つて隆昌進展の一路を辿り、わが國文化史の上に於て大きな足跡を残した時代である。

奈良時代わが國の書道は隆昌の兆を萌したが、平安時代に入つて興隆の極に達し、わが國書道の黄金時代を築き上げた日本書道史上

最も輝かしい時期である。

平安初期は唐との交通が盛んで遣唐使留学僧留学生等によって唐文化の移植が盛んに行われ、中国文化が躍進し中国趣味の流行した時代である。奈良時代盛んであったが和歌が衰え代って漢詩文が盛となりこれが文芸の主流をなし、小野篁・菅原是善・都良香などすぐれた詩人が輩出し俊雲新集・文華秀麗集・経国集等の漢詩文集の編纂も行われた。

書は漢詩文表現の立場から尊重され、ことに嵯峨天皇は詩書を愛好され一般もその風を受けて君臣ともに世を挙げて文墨の道に精進しここに弘仁文化が生み出されるようになった。

当時の書道は留学生留生僧によって彼の地に於て晋唐書の技法が究められこれらの人によってその書技が伝えられ、又一方晋唐のすぐれた法帖が続々輸入されて書学の助長を助けこれら相俟って晋唐書風の名手が輩出し漢詩文の隆昌と共に書道が興隆しわが国に於て晋唐書風の大成を見たのである。

空海・橘逸勢・最澄は共に憲宗の元和年間入唐し晋唐書の正法を会得した人で嵯峨天皇と共に当代を代表する俊秀である。特に嵯峨天皇・空海・橘逸勢を日本三筆と称し大きくわが国書道界を代表する能書家である。

以上を顧みると、漢字の伝来以後わが国の書は全く中国書法の範

疇から脱し得ずわが国民性の純粋なる表現は残念ながら見ることが出来ない。即ちわが国最古の書であると称せられる薬師像光背銘は法隆寺の縁起を刻したものであるが、最初の建物は焼失し現在の法隆寺は天智天皇九年以後に再建されたものと考えられ、薬師像は最初の時の仏像かどうか疑わしいとする学者もある。この光背銘は法隆寺建立を推古天皇の十五年としその由来を記したもので銘文の基本的内容については疑をさしはさむ余地はないが、刻字の日時については法隆寺建立時とは一致しているとはい難いのである。その書風が初唐様式であるので或は白鳳時代のものではなからうか、いづれにしても中国的書法である。

又わが国最初の肉筆であり著書でもある聖徳太子の法華義疏（法華経のすぐれた注釈を爲したるもの）は日本的情緒の現れは見るもその書風は古体であつて六朝写経風である。

次にわが国最古の刻石である宇治橋断碑は僧道登が宇治川に架橋して時人の便をはかった功を称えて石に刻したものである。その書風は誠に筆力雄勁で逞しく北魏の張猛龍碑と相通する純然たる六朝書風である。この碑は碑の上方三分の一だけが古いものであとは江戸時代に補足したものである。

奈良時代わが国書道界を風靡したのは写経であつたが、その写経は結構厳正筆力健勁な唐経を基準としたものである。

当代の名蹟たる多胡部碑は群馬県吉井町にあり多胡部成立の由来を刻したもので、その書風は篆意を持つ堂々たる楷書で筆力は充実し雄勁、規模博大で北魏の鄭道昭の筆致に通ずる堂々たる六朝風である。

聖武天皇の宸筆と伝えられる賢愚経は大聖武の名で呼ばれる茶毘紙という特殊な紙を用いた大字の経で墨痕鮮かて肉太、量感があり翻氣と荘重さを感じさせる偉風堂々たる筆蹟であるが中国書風である。

光明皇后の染教論は気格高く筆力遒勁、躍動的で鋭い気魄に充ち魏晉の書に比し全く遜色はなく日下部鳴鶴も「日本第一の楷書」と絶讃しているが、王羲之の染教論稿本を臨書したもので羲之風たることは論を俟たない。

ついで平安初期の日本三筆の書について考察すると空海の灌頂記は国宝として京都神護寺に蔵されているが、これは弘仁三年十一月十五日の金剛界灌頂と同年十二月十四日の胎藏界灌頂とを受けたる人々の曆名を書いたもので全く不用意の書、所々塗改しているが自由無碍筆力結構ともに自然の妙趣を表し偉大なる高僧の風格を偲ばすものであるが、唐の顔真卿の争座位稿に相通する書である。

又京都教王護国寺に所蔵される国宝風信帖は、空海から最澄に送った尺牘でもと五通あったのが、一通は関白秀次に献じ一通は盜難

にあい現在三通残っていて、一巻の卷子本に仕立てられている。九月十一日付のものは用筆自然にして変化の妙に富んだ行書、九月十三日付のものは雄健莊重を以て優れた行書、九月五日付のものは明澄で清爽白雲の秋空を行くような草書でそれぞれ趣を異にするも、概して縦横に揮毫された卒意の書であって、用筆頗る深く渾厚沈着で行草の妙を発揮しているが全く晋唐書風である。

次に嵯峨天皇の御書に李嶠詩集がある。これは唐李峤の詩百二十首を書かれたものであるが、現在御物として二十首、近衛家に一首残っているに過ぎない。その書風は古味を帯び蒼勁で柔剛錯綜して変化の妙を極めているが、純然たる唐風で歐陽詢の史事帖や仲尼夢奠帖に相通している。

更に橘逸勢の書と称せらるるものに伊都内親王願文がある。これは桓武天皇の第八皇女伊都内親王が、生母藤原平子の遺言により天長十年九月二十一日山階寺へ香燈院経料として墾田十六町歩莊園一ヶ所畠一町歩を寄進し生母の冥福を祈られた願文である。現在御物であって行草書六十七行からなり雄勁暢達躍動美を有する晋唐書風である。

かく見て来ると漢字の伝来より平安初期までの書は中国の模倣に終始したものである。この中国書法は六朝風と晋唐風の二つに大別することが出来る。これは中国六朝時代、南朝・北朝の

二王朝が対立したが書道上その中心をなすものは北朝は北魏、南朝は東晉である。

南朝は建康（南京）を都とし揚子江の南岸江南の勝地を占め気候溫和雨量豊かで、土地は肥沃水運の便に富み天産は豊かである。こうした自然に恵まれた処に住む人はその性自ら温和で、書はその人を写して温雅で韻致に富む。これに反し北魏は北方異民たる鮮卑族の建てた国で洛陽（西安）を都とし黄河上流の地域を占めてゐる。

南朝の地に比べ気候は寒暑の差甚しく雨量乏しく土地は瘦せ加うるに年毎に黄河の氾濫を見、常に自然と戦いながら生活せねばならなかつた。従つて北魏人はその性強悍で武骨であり野生的である。こうした人によつて生み出された書は雄勁であり峻絶であり野趣に富んでいる。これを六朝書風と称し、その代表的書人が鄭道昭である。

わが国に於ける書の流れを概観すると、大和時代から奈良時代の前半までは六朝書風が行われ、奈良時代後半から平安時代初期にかけては専ら晋唐書風が行われたが、いづれも中国書法模倣の域を脱していない。

ところが平安中期（醍醐帝より堀河帝に至る約二百年間）に至りこの様相は一変される。

平安初期の終頃、唐の国勢は衰退の一路を辿り、中国文化のわが国に必要なものは既に吸収し尽され敢て困難な遣唐使派遣を強行

する必要がなくなり、菅原道真の進言により二百六十年間続いた遣唐使も宇多天皇の寛平六年中止されるようになった。その後唐は十余年で滅亡するが、折からわが国は藤原文化の最盛期を迎え中国模倣より離脱し、優美温雅澹洒なわが王朝人の性格を表した独自の新文化が百般の上に表われるようになった。建築・彫刻・工芸・絵画・文学・音楽・玩具・諸調度品・服飾に至るまで従来の中国様式を脱し純然たる日本様式となつた。これは中国文化の輸入がとだえたからという理由のみでなく、わが国は中国文化を踏まえて高度の発達をして居り人心が文化の時代転換を欲していたものと考えられる。

文学方面についてこれを見ると、天皇の勅命により詩歌文章を撰し編集したものを勅選集というが、これまでの勅選集は漢詩文ばかりであつた。ところが醍醐天皇の延喜五年わが国最初の勅選和歌集である古今和歌集の撰が紀友則・紀貫之・九河内躬恒・壬生忠岑によつて行われ、奈良時代万葉集の編纂されて以来久しく漢詩文に押されて表向きの文学としての取扱を受けなかつた和歌がここで再び陽の目を見るようになった。この古今集の撰より先立ち宇多天皇がしばしば歌合せを主宰しておられる。こうして和歌が漢詩文を凌いで文芸の主流に復帰すようになった。

又絵画について見れば従来中国の山水や中国の人物を中国画法で

描いていた唐絵が、わが國の山水・人物をわが國独自の描法でかく大和絵と化した。

更に書道について見ると前述の通り漢字の伝来より平安初期までは全く中国書法の模倣を事として来たが、この期に入り中国との交渉が少くなるにつれ、わが書の上に次第に唐風の色彩が薄くなり、漢字に於て日本の意識に富み豊麗温雅で流麗優美な新書風が生れた。この新書風は中国書風とは著しく異り唐風には見られぬ芸術美を表現している。この書風を和椽体と呼んでいる。その代表者に日本三蹟がある。小野道風は和椽体の開拓者でありその書屏風土代は豊潤流麗悠揚迫らぬ筆致で和椽体の素因をなすものである。藤原佐理は道風の後を受けた和椽体の継承者で道風よりも更に軟く温く鶴達した書をなしたが、中年以降は蒼勁飛動的な中国伝統の書に立ちかえった。藤原行成は道風佐理を受けて温雅秀麗な書をなし和椽体の完成者である。その書本能寺切はおだやかで暖味を持ち豊麗優美な筆致である。この行成を始祖とする和椽体の流を世尊寺流と称し永く後世に伝わる。江戸時代官府文字として全盛を極めた尊円法親王を祖とする御家流もこの世尊寺流から出たものである。尚現在日常の用を足すに人々は漢字と仮名とを混交して使用するが、この兩者の調和が必要でこの面での指針となるべきものは行成筆御物粘葉本倭漢朗詠集がある。詩は完成された見事な和椽体で歌は仮名で

表現されて居り兩者がよく調和している。

以上は漢字の面で、書が中国書法より独立してわが国民性を表した純日本書道の成立したことを述べたのであるが、この平安中期に於て日本文化史上又書道史上特筆すべき事項が出現した。

それは仮名の創成である。漢字伝来当初漢字は一部上流階級の間に於てのみ使用されていたが、奈良時代写経が隆盛となり風土記の撰などが行われて漢字の使用は全国的に普及した。しかし漢字は何といつても他國文字でこれによって國語を表現するのは極めて困難である。奈良時代の先人はこの困難を克服し、漢字を使用してその借音交訓によって國語を表現する万葉仮名を考え出した。しかし万葉仮名は繁画で書写に不便である。平安時代に入り漢字の省略体で一字一音式の文字を創成した。これが仮名で四十七文字あれば充分國語を表現し得るようになった。仮名は現在片仮名平仮名の二種が普通使用されている。共に漢字を母体とするが全く新しい日本語の出現である。

仮名は漢字を「真字^{まんな}」(真名とも書く)とするに対し「仮りの名」という意味で「かりな」となり「かんな」となり更に「かな」となった。

仮名の種類は、片仮名(古名ではかたかな)平仮名(女手、女文字)変体仮名(男にもあらず女にもあらず)万葉仮名(男手)の

四種がある。このうち平仮名変体仮名の二者を合して草仮名といひ、平安時代の草仮名を上代様仮名という。

片仮名は「阿伊宇江」のように漢字楷書の一部分を取つたもので、漢字の片体つまり完全なる漢字の片方、形体不完全の意である。奈良時代末葉から平安初期にかけて漢文字が興隆し和就上訓点として万葉仮名を使用したのが狭い字間行間に書く万葉仮名が次第に省画され符号化して遂に片仮名が生れた。

俗に吉備真備の独創のように伝えられるがこれは恐らく臆説で長年月の間に多数の人々により次第に省略完成していったもので古文書に使用された片仮名は二百三十余もあったが明治三十三年小学校令によって現在使用のものが確定した。

平仮名は *い・ひ・ふ・え・お* は *は・ひ・は* *に・ほ・ほ* *ほ* のように漢字の草書を更に草化したものでその名称は古いものにはない。

創成期から江戸初期までは女文字・女手と呼んでいた。平仮名と称せられるようになったのは江戸元禄時代以後で平易なる仮名という意味である。平仮名の創成者を空海とする説もあるがこれも恐らく誤りで空海が涅槃経を意訳して「いろは歌」を作ったと称せられるところから生じた臆説と見るべきである。平仮名も片仮名同様長年月間に多数の人の手によって成されたものと考えられる。

片仮名が漢文の間に於て男文字として発達したのに対し、平仮名は和文の間に於て女文字・女手として発達した史的経過から見て平仮名の創成者は平安時代の女性と考うべきである。

平安初期男女の教育に差別があり女性は漢文に手を触れることが出来なかつたからいきおい国文の世界にとじこもり、漢字の字面に拘泥することなく自由に大胆に趣味的に草書を草化していったのが遂に平仮名と成つたものと考えられる。

中国文字を自在に変形させ日本人好みの優美な筆遣いで書き続けたり做し書きをしたのは当時の女性の感覚によつたものと見るべきで、漢字から追放された女性が文字として得た仮名が今日の国語表記に利用されている現状を見ると平安時代の女性の文化的功績は実に大きい。中国文化に心酔し恐懼謙言の体の男性では漢字の草体をあれまでに大胆に省略化することは出来なかつたであろう。

しかし、中国式の漢文を書いていた当時の男性も仮名が便利なるものであり、ことに和歌などを多く詠むようになってからは次第に「心を入れて女手を習う」ようになった。かくて国文学が隆昌に赴くにつれ草仮名は男性の間に於ても多く使用されるようになり、連綿遊糸の仮名美を發揮した上代様仮名には男性の力も加わりその完成は藤原行成を中心とした寛弘期と考えられる。

平安時代に作られた草仮名は三百五十余字の多きに達したが、明

治三十三年の小学校令によって現在の平仮名四十八文字が定まりこれ以外の草仮名を変体仮名と呼ぶ。

仮名の出現は実用上に於ても文学上に於ても非常な便益を与えた。わが国民はこれにより始めて国語を平易簡明正確迅速に記述することが出来るようになった。

平安中期国文学が勃興し純粹の国語で記述した源氏物語をはじめ多数の物語・日記・随筆・歌集等があらわれ後世まで日本文学の華と輝いているが、これは全く仮名の恩恵によって生れたもので、この文学に盛られた情趣は仮名文字なくしては絶対に表し得なかつたものと思う。

なおここに相関性があり、仮名の出現によって仮名文学が発達し、この文学の持つ情趣を享けて仮名美が展開発達したのである。

由来奈良文学は素朴・純真・豪放・適勁であるが、平安文学ではその多くが失われ、纖巧・優美・婉曲・流麗でその洗練された感情は誠に他に較ぶべくもない。しかし単なる纖巧優美ではなくその中を貫流する一つの趣がある。「物のあわれ」というか仏教的なある陰を持っている。いわゆる艶にあえかなる、妙にをかしき、優にやさしきのみでなく、厭味のない艶やかさ、あくどくない美しさ、締のある柔軟性、幽なる明らかさ、限りのある婉やかさが味わわれる。この情趣を受けて独自の精華を表したものが上代様仮名である。

る。

上代様仮名はその線条、温雅流麗でよく錫達し雄勁の力を内蔵している。これは日本女性が外貌柔和と内面強靱、即ち外見のすがたかたちは美しくとやかであるが心の強さを持つていることを暗示し、その形態は端正優美で気品が高い。これは教養高く容姿端麗な日本女性を象徴し、更にその連綿は流水の如く迂余曲折して変化の妙を極めていく。これは平安女性のたしなんだ和歌の情趣を遺憾なく表している。

由来他国の文化を取り入れこれを咀嚼吸収して巧みに自国のものとしその上に独自の文化を生み出すのは、わが国民性の一大長所である。こうした経路を辿ってわが国は今日の発展を来たしたのであるが、書道に於ても奈良時代の先人は唐文化模倣の根底に於て日本文化の独立を計らんとする激しい意欲を持っていた。しかし残念ながら当代に於てはこれを果し得なかつた。その後二百余年を経過し、久しく中国書道に隸属していたわが国書道に於て純日本書道たる和様体を創成し、更にわが国独自の仮名書道を生み出し、ここに純日本書道の確立を見るようになった。

その後幾多の変遷はあるも、かなの美こそ誠に世界に誇るわが国のみを持つ国民的芸術である。